
依存とケアの水

目取真俊「水滴」における記憶の現在性の再考

KUROSAWA Masato

黒沢 祐人

はじめに——沖縄戦の記憶の現在性と、ケアを必要とする身体

目取真俊の「水滴」⁽¹⁾は、過去の出来事として定位することのできない沖縄戦の記憶の現在性の問題を取り扱った作品であり、彼の作品のなかでも最も多くの論考を生み出している。沖縄戦体験者である物語の主人公徳正は、戦争の語り部として戦後の共同体の中で受け入れられているが、その語りが共同体の欲望する戦争譚に沿うものとして提示されることによって、そうした理想的な戦争像から逸脱するかれの記憶は語りえないものとして抑圧されてしまう。多くの論考がこの歴史／記憶の緊張関係と、そうした関係を通じて沖縄戦の記憶の現在性を描く優れた作品として「水滴」を読み、高い評価を与えてきた。語りえない記憶の存在を語るという困難を引き受ける作品に対するこのような肯定的な評価は、80年代までに確立していた実証史的なマスター・ナラティヴによる沖縄の戦争体験をめぐる歴史叙述に対し、90年代以降さまざまな批判や問題提起が生じていた背景を考えると極めて妥当といえよう⁽²⁾。

また、「水滴」では、以上のような、歴史や集団の記憶から排除されてしまう記憶の領域を描くための方法として、とりわけ身体性を前景化するモチーフや文体が利用されていることにも注目がなされてきた。主要な論文としては、新城郁夫や村上陽子らのものが挙げられる。新城は、日常性や身体感覚が細かに描かれることによって過去と現在の境界が曖昧になり、「官能的ですらある皮膚感覚が、非現実的なストーリーの展開に〈いま・ここ〉という現場性を与えている」とし、身体性を通じて記憶の問題が現在の問題に他ならない事実を提示している作品として「水滴」を読んだ⁽³⁾。村上は、「いま、ここの身体に記憶が現前する瞬間、出来事の最中において聞き捨ててしまった声、答えることができなかった呼びかけが響いてくる」とし、理解不可能な他者との出会い直しにおいて出来事の内部に引き戻される経験を生じさせる発条として身体性を捉える⁽⁴⁾。

とはいえ、それらの論考では身体性が、歴史や集団の記憶の規範性への抵抗という特権的な役割を担わされることによって、むしろ本来は人間身体というものが前提とする生の具体性・脆弱性が捨象されてきてしまったようにみえる。例えば、村上の指摘するような、沖縄戦という「出来事の内部へ引き戻されてしまう」経験をもつ者は、いわゆる「トラウマ」を抱えている脆弱な存在なのであり、そのような脆弱な存在を単に抵抗する主体として理解することはできないのではないか。本稿では、そうした生の具体性・脆弱性の観点から今一度こ

(1) 目取真俊「水滴」(『文学界』1997年4月号)。本稿では大きな差異がないことを確認したのち『目取真俊短編小説選集2：赤い椰子の葉』(影書房、2013年)に掲載のものを参照・引用した。

(2) 屋嘉比取『沖縄戦、米軍占領史を学びなおす：記憶をいかに継承するか』(世織書房、2009年)、

第1章「戦後世代が沖縄戦の当事者となる試み」を参照。

(3) 新城郁夫『沖縄文学という企て：葛藤する言語・身体・記憶』(インパクト出版会、2003年) 134頁。

(4) 村上陽子『出来事の残響：原爆文学と沖縄文学』(インパクト出版会、2015年) 247頁。

の作品の描く記憶の現在性の意味を学び直すために、「依存とケア」⁽⁵⁾を新たに主題化することによる読解を試みたい⁽⁶⁾。

依存とケアを主題とすることは、私たち読み手が現在の問題とどのように向き合うべきかという実践とも関係する。議論の内容を先取りすることになるが、たとえば、徳正は、理想的な戦争の語り部として集団内における自らの立場を守るが、この行為が戦場で見捨ててしまった戦友に対する倫理観と矛盾することで葛藤する。この集団的規範と個人的倫理のジレンマと向き合うことの意味が、依存とケアの実践を通じて描かれているのが「水滴」である。

翻って、沖縄は「捨て石」や「要石」といった言葉が象徴するように、戦時中から現在に至るまで、国防のための手段とされてきた。現在も、辺野古への普天間基地移設問題に見られるように、先の知事選の結果にも示されるような沖縄県民の意志を踏みにじるかたちで、工事が「粛々と」進行している。つまり、国家の都合が最優先されることによって、沖縄の歴史と生活に脈々と息づく人々の倫理が蔑ろにされている状況があるといえる。その上、一連の暴挙を、「沖縄の負担軽減」や「沖縄の気持ちに寄り添う」といった、あたかも沖縄に対する配慮のためであるとして振る舞う政権の倒錯をどのように理解すればよいのか。さらに、目取真俊「平和通りと名付けられた街を歩いて」を論じる際に栗山雄佑が指摘しているように、そのような国家ぐるみの暴力を感じ、抵抗へと向かいという倫理観を持ちながらも、実際には、自らの生活や立場を守るために、集団に共有された規範を優先し、具体的な行動には移せない

(5)「ケア care」は、他者を実際に「世話」したり「看病」したりすることを始め、他者に対する「心配」や「配慮」、「気遣い」といった直接行為に繋がらない心的態度までを含み（前者をケアリング、後者をケアとして区別する場合もある）、広義には一つの対象へ自らの関心と時間を与えること（「専心」）を意味する。なおケアの本質が専心であることから、ケアの対象には他でもないこの対象であるという具体性が常に伴う。ミルトン・メイヤロフ『ケアの本質』（岡本真・向野宣之訳、ゆめり書房、1987年）、小館貴幸「死者とケア——ケアにおいて存在しうる死者——」『ケアの始まる場所：哲学・倫理学・教育学からの11章』（金井淑子・竹内聖一編、ナカニシヤ出版、2015年、146-168頁）を参照。

(6)記憶の問題や国家・権力への抵抗といった主題によって見失われる生の具体性について注目する論考としては、栗山雄佑「『平和通りと名付けられた街を歩いて』論——テロルの裏の沈黙について」（『越境広場』4号、2017年、66-73頁）

における目取真俊「平和通りと名付けられた街を歩いて」（『新沖縄文学』70号、沖縄タイムス社、1986年12月）の読解がひとつの例となるだろう。この論考では、抵抗の主体にばかり注目することによって、その主体の生活領域において係累する人々の「抵抗後の生」の困難さが見失われてしまうことが指摘されている。また、他者の理解不可能性よりも、むしろそのような不可能性を踏まえたうえでの人々の具体的なつながりを読み取ろうという本稿の試みに重なる論考としては、村上克尚「波及する戦争——『眼の奥の森』を読むために」（『越境広場』前掲、28-36頁）がある。同論考は「傷つけられた者たちが、その傷を媒介に寄り添い合い、自分の生を倍化していくことで、それぞれの場所で、波及する戦争に抵抗していくという可能性」（同上、34頁）を目取真俊『眼の奥の森』（影書房、2009年）に読み込んでいる。

い人々も無数にいるはずである⁽⁷⁾。日々の生活と抵抗を結びつけるには、果たしてどのような実践が可能なのだろうか。

以下、既存の論考の中では捉えきれなかった作中登場人物たちの具体的で包括的な関係性の存在を可視化させ、沖縄戦の記憶の現在性の意味するものを明らかにするなかで、「水滴」というテキストから、依存とケアの実践を通じた抵抗の生活のあり方を読み取っていきたい。

1. 戦場における依存とケア——戦場と戦後をつなぐケアの「失敗」

「水滴」は戦後五十年ほどした六月の半ばのある日、鉄血勤皇隊として沖縄戦を体験した者のひとりである徳正が、突然右足を大きく腫らして身動きが取れなくなることにより始まる。これにより、徳正の生活は一時他者のケアに依存し、妻であるウシがかれをケアする必要に迫られる。この小説において、二人の関係は重要ではあるが、しかしそれはまた物語を構成するさまざまなケア関係（ケア行為によって結ばれる関係）の一つに過ぎない。これから確認するように、「水滴」の物語は、様々な依存とケアの関係が通時的かつ共時的に入り組んだ織物となって成立しているのである。つまり、ウシと徳正とのあいだにおける二者関係のケアを確認するだけでは不十分なのだ。

本節では、主に戦場における依存とケアを確認する。まず、女性によるケア行為のステレオタイプ表象の問題について言及し、そのうえで、徳正のケア行為における「失敗」の意味について、戦場と戦後をつなぐ依存とケアの関係のあり方を明らかにすることを念頭に置きながら解釈し、以降の議論の論点をいくつか提示したい。戦場でのケア行為の分析を経ることによって、戦後の依存とケアの関係とそれらが密接に関わっていることが理解できるようになるはずである。

はじめに、女性によるケア行為において見られるステレオタイプの問題についてである。このことを考えるために、瀕死の友人である石嶺を介抱する徳正のもとに、女子学徒隊の一人で知り合いである宮城セツが近づいてくる次の場面を見ることから始めたい。

まともに歩ける兵隊の方が少なかった。肩を貸し合い、杖にすがった兵隊達は、雨でぬかるむ斜面を他の者を巻き添えにしながら滑り落ち、罵り合う。静かにしろ、という押し殺した声が走る。担架で仲間を運んでいく女子学徒隊の中から一つの影が近づいてきた。

(7) 栗山雄佑、前掲書、66-73頁。

「石嶺さんの具合はどうですか」

同じ村の出身だと知ってから、顔を合わせると短い会話を交わすようになった宮城セツだった。岩壁にもたれて細い息を漏らしている石嶺は、支えてやらなければ崩れ落ちてしまう状態だった。徳正は首を振った。セツもそれ以上訊ねようとしなかった。荒れた指が手首を強く握りしめる。掌に水筒と紙袋が押しつけられた。⁽⁸⁾

後述するように、徳正は、混沌とした戦場の場面のなかで、さまざまな他者と複雑なケア関係をとりもち、それが記憶の問題に現在性を与えているきっかけとなっている。しかし、その一方で、女子学徒隊や、宮城セツの行為は、献身的に他者をケアする者としてわかりやすく模範的な姿で描かれているため、そこで生じるケア関係が完結したものとして対象化されてしまう。このことによって、過去が過去として定位され、現在とのつながりを失ってしまうのだ。

ケアが女性の行為として描かれるとき、とくにその表象がステレオタイプ化して読み手の欲望するものをそのまま差し出してしまうことで、上記の場面のように「担架で仲間を運んでいく」者たちとして後景化し、そのためにほとんど読み手の意識に上らないということには注意しなければならない。たしかに物語の進行上、焦点の当たらない存在が生じることは避けられないが、たとえば、この物語の成立に必要な不可欠であるはずのウシのケア行為が、今までの先行研究においてほとんど注目されてこなかったという事実にも、公的領域（その一つの例としてここでは、歴史／記憶の問題を語るアカデミズムの場が想定される）において、女性によるケア行為がつねに排除されてきたというジェンダーの問題が反映している可能性がある。

他方、次のような場面を見ると、物語の中心に置かれた徳正と石嶺をめぐるケア関係に関しては、女子学徒隊を描いた場合において見られるような、ケアの理想化やステレオタイプ化を免れる複雑さを伴っていることがわかる。

夕方、水を汲みに出た徳正達を艦砲の至近弾が襲った。一緒にいた三名の女子学生達は即死状態だった。石嶺も破片で腹を裂かれ、どうにか動けるのは徳正だけだった。うめきながら腹を抑えている石嶺の掌から、豚や山羊を解体する時に目にした物と同じ物が

(8) 本文、218頁。

はみ出している。巻脚絆を解いて石嶺の腹に巻き、壕まで引きずってきた。戻るとすぐに食料や水を求める兵隊達の罵声を浴びた。入り口の近くに寝かせたまま、急いで水を汲みに行かなければならなかった。⁽⁹⁾

石嶺は重傷を負い、軽症であった徳正は、石嶺の介抱^{ケア}をすることになる。傷口に巻脚絆を巻いて裂かれた腹をふさぎ、身の危険を犯しつつも、かれを壕まで運んでいくのである。しかし、壕に隠れている兵隊達による要求は、石嶺に対するケアを否応もなく中断させる。こうした場面から看取できるのは、戦時下における上意下達の間人間関係においては軍の命令こそが至上であり、特定の他者に対するケアはつねに後回しにされてしまうという明白な事実である。そしてこのジレンマは、冒頭でも言及したように、実は、集団的規範と個人的倫理観との矛盾として、形を変えながらも戦後の徳正を悩ませる要因ともなっている。つまり、戦争の語り部として理想的な戦争体験を語ることが求められる徳正は、その規範性に従うことで集団内での立場を守るが、戦場での実体験に基づく個人的な倫理観が、そのような語り部として生きる自分に葛藤を生み出してしまうのである。戦争と戦後が、ケアを困難にするという点において似たような状況をもたらしているということには注目してよいだろう。このジレンマと関わる徳正の「自責感」の問題については次節でさらに詳しく論じる。

次に、依存とケアの関係における「偶然性」と、「痛みを表現すること」の意味を確認したい。そもそも、危険な状況下にもかかわらず、なぜ治療不可能なほどの重傷を負った石嶺に対し、徳正はその場で見捨てずケア行為を行うことが可能だったのか。たとえば、親密な間柄にあった石嶺だからこそ徳正はケアを試みたと考えることは自然であろう。しかし、その一方で、「どうにか動けるのは徳正だけだった」とあるように、石嶺をケアする能力をもつ存在がその場に徳正しかいなかったという点こそ、この際重要である。たとえば、「水滴」には次のような場面もあった。

その兵に会ったのは、糞尿の入った桶を運び出そうとしている時だった。壁際の寝台から伸びてくる手を振り切りながら進んでいたのだが、桶の縁をつかまえられて、中身が寝ている兵隊の顔にかかった。罵声が飛んでくるかと身をすくめたが、声はなかった。出入口に近かったこともあって、糞尿に濡れた顔を薄明かりに確認できた。兵隊は舌を

(9) 本文、217頁。

伸ばして口のまわりの汚水をなめていた。胸に巻いた包帯が引切りなしに動いている。頭がゆっくりと動き、眼窩^{がんか}の奥の目が自分を見つめているのが分かった。明日までもたないだろうと思った。「すぐに水を持ってきます」と言って先に進んだが、約束は果たせなかった。⁽¹⁰⁾

むろん、「約束は果たせなかった」とあるように、たしかにこのケアは結果として、失敗に終わる。しかし、徳正がケアの要求を感受するということまでは、たしかに成立しているのだ。この二人に面識はない。しかし、ケアする者とされる者との関係は、偶然居合わせた他人同士においても生じる可能性が十分にあるということをこの場面は示している。そしてここで何より重要なのは、「糞尿に濡れた顔」を、ケアを必要とする他者の脆弱さを示しているものとして、徳正がたしかに解釈できているという点である。たとえある者が他者のケアを必要としていても、それが外部において確認できる表現として他者の注意を引かなくては、依存とケアの関係に他者を巻き込むことはできない。とすると、たとえば戦後の徳正が語りえない記憶を抱え込むことによって感じる痛みは、それを何らかの表現として外部に示すことができているがゆえに、本来必要な他者のケアが与えられる可能性を制限してしまったのではないか。この痛みを表現することのもつ意味については、第3節でさらに論じていく。

最後に、「ケアする者の脆弱性」の意味について述べ、次節に移りたい。以上のような依存とケアの関係をとりもちながらも、戦場を生きる徳正は、最終的には石嶺やほかの兵士のケアにやはり失敗してしまうのだった。たとえば、石嶺を置きざりにし、砲弾を避けながら森を駆け抜ける場面では、自分が「置き去りにされる恐怖」のために「這ってくる兵の手を払って」走り続け、「米軍に発見されることを恐れ」たがゆえに「手榴弾で自決した兵士を罵って」さえいる⁽¹¹⁾。ここで強調されるのは、徳正が徹底的に恐怖に陥れられているという点である。言うまでもなく、戦場においてはケアを必要とする脆弱な存在がいたるところに存在する。当然、そうした脆弱な存在の呼びかけを受けた人々も数知れず存在しただろう。しかし、戦場という空間においては、自らもまたあまりに脆弱な存在であるがゆえに、死の恐怖が支配し、求められたケア行為を困難にする。ケアする者の脆弱性を考慮することは、ジェンダーの観点からもとりわけ重要な点であり、このことは第4節での議論の中心としたい。

以上の点を踏まえて、戦場でのケアの「失敗」が、戦後に継続する死者と生者のつながり

(10) 本文、212頁。

(11) 本文、220頁。

をいかにして可能にしているのかを次節で確認したい。この「失敗」にもとづいて、戦後、再び徳正はケア関係のやり直しを試みることになるだろう。

2. 新たなケアによる生の変容——記憶の現在性のケア論的解釈

本節では、物語の中心を占める、石嶺や兵士たちの幽霊と徳正が取りもつ依存とケアの関係が、現在の徳正の生活に対してどのような意味をもっているのかを、ケア論的な解釈を展開して明らかにしていく。

前節で見たように、徳正は戦場をさまようさなか、ケアを必要とする者たちと出会った。そこでかれは依存とケアの関係を一時的に取り持ったが、相手の要求を満たすことができずに終わったのだった。戦争は、自分自身の脆弱性と兵士としての規律遵守のために、依存とケアの関係を困難にしてしまう。しかしその一方で、傷ついた者たちとの間に生じた依存とケアの関係は、「失敗」というかたちで徳正の記憶に深く痕跡を残すこととなる。およそ五十年のあいだ秘匿されていたその痕跡は、ある日「奇形」としてとつぜん徳正の身体に到来する。そしてまもなく、ともに壕に隠れていたあのかのときの兵士たちの幽霊が、徳正の寝室に忽然と現れる。ここから、徳正によるケアのやり直しが再開する。

足元の男が踵に口をつけ、足の裏をなめ始める。恐ろしさとくすぐったさで、徳正は顔を歪め、おかしくなりそうな頭を正常に保とうと豊年祭の村踊りの歌詞を諳じた。間を置かず、先頭に立っていた男がしゃがんで水を飲み始める。[……] 壁の時計を見ると一人二分程度。滴る程度の水では、それだけの時間で乾きを癒すのは難しいらしく、たいがいの兵隊は立ち去る時に未練げに足に目をやり、次の兵隊に急かされて順を譲るものも少なくなかった。時折は足の裏をなめ上げたり、水の出が悪くなったのか親指を口に含んで吸う者までいて、徳正はくすぐったさに目を剥いた。それにもしだいに慣れてくると、うつらうつらと浅い眠りをくり返した。⁽¹²⁾

この場面においてひとまず注目したいのは「滴る程度の水では、それだけの時間で乾きを癒すのは難しい」という一文である。ここでは、徳正のケアが長期的なものになるということが示唆されている。じっさい、一回の接触によってケアが成就することはなく、徳正による夜

(12) 本文、199、200頁。[……] は中略の意。以降の引用文についても同様。

間のケア行為は、長時間、複数回に及ぶものとなる。つまり、「水滴」に描かれる依存とケアの関係とは、時間を必要とする関係であり、一定の時間の共有のなかで徐々に培われていくものなのである。この点については、ウシと徳正の関係をめぐって再び論じるが、ここでは、こうしたケアの長期的なあり方とまったく対照的な癒しもこの小説には描かれていることも確認しておきたい。すなわち、清裕の「奇跡の水」による癒しである。

水の効能は清裕の予想以上だった。五十年來の禿という老人の染みだらけの頭にさえ、五分もしないうちに産毛が生えてきた。最初はバカにした顔で笑っていた若禿の高校教師も、試して三分後には有金はいいて水を買っていった。⁽¹³⁾

水の効能は、「五分」や「三分」で表れるほど極端な即効性を発揮する。清裕自身、はじめ水を頭にかけた際、「効果が表れるのに五分もかからなかった」⁽¹⁴⁾。「奇跡の水」の癒しは、時間のかかる徳正と石嶺たちとのケア関係とは対照的に、短時間で「効果」が表れるものとしてあった。それが「効果」として目に見えるのは、特定の目的に対する手段としての「癒し＝治療」であるからだといえよう。後述するが、こうした「治療」を目的とした「奇跡の水」による癒しには、徳正と石嶺との依存とケアの営みにおいて紡ぎ出されるような関係性を生む余地はない。作者がこの小説のモチーフを、単なる「水」ではなく、あくまで徐々に滴るものとしての「水滴」としたことは、上述したような治療とケアの時間性の差異を考慮すると、極めて妥当であったといえる。この水滴というモチーフによってあらわれる「依存とケアの水」については、本論の末尾において再び言及したい。

前節との関係で次に確認したいのは、徳正の置かれた状況についてである。寝室という人間の生活にとって最も親密性の高いであろうこの私的な空間は、つねにどこに敵が潜んでいるかしの戦場とは正反対の空間である。実際、身動きできずに一方的に身体を利用されている徳正ではあるが、「次第に慣れてくると、うつらうつらと浅い眠り」にまで至るほどには安心している。また、一方でこの状況は、寝室という空間に戦場の暴力的状況が侵食しているということをも意味する。そこはもはや単なる親密な空間などではなく、傷つきケアを必要とする他者との出会いの場となっている。この異質な空間どうしの相互干渉を生じさせるような時空間が、徳正の記憶を媒介として呼び起こされることによって現在の生活と過去の戦

(13) 本文、213頁。

(14) 本文、208頁。

場とが重なり合い、自らの脆弱性と兵士としての規範遵守によって失敗に終わった戦場での依存とケアの関係のやり直しを、現在時において可能にしている。そしてここで結び結ばれる「新たなケア」の関係が、これから確認するように、徳正の生活にある変化を生み出すのである。このことを考察するためには、まずケアの失敗のために徳正が抱えていた「自責感」について再考することが必要とされる。先行研究でしばしば指摘されてきたように、記憶の突発的な現在への回帰が生じたのは、徳正が戦火を生き残った者として、戦場で見捨てた兵士たちに対し自責感をもっていたことによる。そして従来この自責感は、戦後、徳正が戦場の記憶を過去のことでありて葬り去ることができずにいる要因であり、自らの体験を周囲の人間に明かすことをためらわせる桎梏となっていると否定的に捉えられてきたようにみえる⁽¹⁵⁾。しかしながら、この小説を読む限り、そもそも、そのような自責感が解消されることに価値が置かれているとは到底思えない。というのも、自責感の解消は、石嶺の忘却以外にありえないからである。そして忘却の不可能性こそ「水滴」という物語を可能にし、また、作品が描くものであるとしたなら、この自責感は、小説の根幹を担うものであるとして読まなければならないはずだ。それゆえ本稿では、自責感をもつことによってむしろ可能となる生のあり方を想像した作品として「水滴」を読む可能性を追求したい。

ケアを哲学的に論じた先駆者であるメイヤロフによれば、自責の念というものが依存とケアの関係にかかわるとき、そこには「新たなケア」の可能性が秘められているという。

《病変があれば痛みを感じるように、自責感によって、私はどこがいけないのだと考える。それが相当強く感じられ、理解できて受け容れられる場合、私はその自責感により、相手に対して責任を持つ者に立ち返ることができているのである。》この立ち返ることは、必ずしもこの関係が壊れる以前に戻ることを意味しない。[……] 私は、単に自責感を克服したいがために再びケアにたずさわるのではなく、逆に、新たなケアをすることによってこの自責感を克服できるのである。⁽¹⁶⁾

ケア論において、自責感というのは克服するためのものとしてではなく、ケア関係を成立させる根本的な感情として評価される。そしてそのような自責感によって可能になった「新たなケ

(15) 贖罪（失敗）譚としての読解の例は少なくないが、その失敗による個人的な記憶の問題の解決不可能性が強調されるばかりであった。例えば、宮沢剛は「自分の生の根幹に非－人間的生を見なければならぬ恥辱感の回帰」として贖罪の失敗を読んでいく（宮沢剛「目取真俊『水滴』論

——幽霊と出会うために」『文学の闇／近代の沈黙』〔「文学年報」創刊号〕2003年所収）。本稿はむしろ、そうした自責感をもって生きる人間の生の新たな可能性をこそテキストに読み取る。

(16) ミルトン・メイヤロフ、前掲書、81頁。

ア」が持つ意味について、メイヤロフは次のように説明する。

私のするケアが十分包括的なものであるならば、このケアは私の生活のあらゆる領域に深くかかわってきて、実りある秩序を提示する。このような具合に、ケアはある中心となるものを設定するのであり、そのまわりに私の活動や経験というものが全人格的に統合されてくるのである。このことは、奥深くたたえられている世界に対して自己を調和させる結果となる。⁽¹⁷⁾

このことを踏まえて徳正がによる石嶺たちに対するケア行為の意味をもう一度、解釈しなおす必要がある。共同体の期待がなんであるかを配慮し、それに応えるためにステレオタイプな戦争体験を語る徳正は、その誤った対象に向けられたケアによって、彼が本来ケアすべき対象である石嶺を裏切ってしまう。その結果として生が秩序を失い、断片化していた。徳正の感じる自責感とはこのような断片化された生のなかで徐々に育まれたものである。そして物語が示すように、この自責感の高まりは記憶を媒介として過去と現在の空間を重ね合わせ、それによって石嶺との再会を可能にすることで、徳正が本来ケアすべき対象と向き合う時間をつくりだした。ここで、そのようなケア行為がケアする者の生に秩序を与えるものであるとするケア論の知見を踏まえれば、この依存とケアの関係によって、むしろ徳正のほうが、断片化していた生の秩序を回復している可能性があると考えerる必要性が理解できる。すなわち、戦場でのケアの失敗は、徳正の記憶にたしかに「傷＝自責感」として残ったが、その傷を中心にして、その傷なしではありえない「新たなケア」の関係を生み出しているのではないか。その関係を通じた新たな生活のあり方こそが「水滴」の物語が提示しようとしているものではないだろうか。

しかしまた、「なぜ自分がこんな目に遭わなければならないのか。徳正は日に何十回もそう嘆いたが、理由を考えようとはしなかった」⁽¹⁸⁾とあるように、こうしたケア行為の避けられなさに向き合うことに対して徳正はたびたび拒絶の姿勢を示し、最終的にも、ふいにわいた「怒り」を石嶺にぶつけて、本来ケアすべき相手に対しむき出しの敵意を抱いてしまう⁽¹⁹⁾。その意味では、このケア自体が「十分包括的な」かたちで徳正の自己と世界とのあいだに調和を

(17) ミルトン・メイヤロフ、前掲書、112、113頁。

(18) 本文、209頁。

(19) 本文、222、223頁。

生んでいるとはいいいがたい⁽²⁰⁾。

おそらくこの困難さはまた、徳正自身が脆弱な存在でもあるからだ。ケアの失敗は、ケアする者の弱さを暗に示す。石嶺たちに対するケアを、徳正の生きる希望へとつなげるためには、徳正自身がケアする者として自律するべく、弱い存在として誰かからのケアを受け取る必要があるのだ。十分包括的なケアなるものを考えるとき、この点をさらに考慮することが当然要請される。徳正はいかなるケアを必要としているのか。あるいはいかなるケアをすでに受け取っているのか。これが次節以降の議論における要点である。

3. 倒れた徳正を誰がケアするのか——ウシのケア行為への注目

本節では「水滴」におけるより包括的な依存とケアの関係を考えるために、ウシによる徳正へのケア行為に特に注目して議論を展開したい。倒れた徳正は、ウシのケアがあったからこそ、石嶺との時間を共有できたのである。そのウシのケア行為を分析することなくして、「水滴」を依存とケアの観点から語ることは意味をなさないであろう。

このウシの存在については、すでに従来の研究において、ジェンダーの観点から批判が出ている。たとえば、村上陽子は「水滴」における女性の身体性が希薄である点を指摘し、徳正と石嶺を中心に描かれる「水と記憶の循環」や、清裕をめぐる「金の循環」の両者からウシが排除されていることを批判している。一方でまた村上は、「水滴」における女性身体が生殖と無縁のものとしての表象を与えられているために、そこに「母」を中心とする家族規範を読み取することを拒絶しているともさらに指摘する。それゆえ「水滴」には「家族的なものによって癒されることのない沖縄戦の記憶や、無残なまでに家族の共同性を断絶してしまった暴力の痕跡が見出せる」とする⁽²¹⁾。

とはいえ、これまで論じてきたように、本稿では、依存とケアの関係を通じての、いまここに表れる暴力の痕跡としての語りえない記憶に根ざした、あらたな生活のあり方を描いたも

(20) たとえば、スーザン・ブーテレイは、徳正の「怒り」を「石嶺および他の戦友の使者たちの呪縛からの解放をはかり」「自分の主体性を取り戻そう」とする行為であるとして、むしろ肯定的にとらえる（スーザン・ブーテレイ『目取真俊の世界：歴史・記憶・物語』影書房、2011年、52、53頁）。しかし、第4節で述べるように、目の前の脆弱な者の呼びかけに応えざるをえないというケアする者の受動性は、自律的主体の自由を価値づけるリベラルな主体にとっては主体の自律性を阻害するものにほかならないが、ケア関係においては本質的なものである。依存とケアの関係に

おける自由や自律は、それが依存を前提とした上で初めて成立するものであり、メイヤロフは「自律とは、成熟とか得がたい友情の深まりと同じく、ひとつの達成なのである」とし、「他者と依存関係にあるがゆえに、自律的であり得る」とまで提言している（ミルトン・メイヤロフ、前掲書、162、163頁）。

(21) 村上陽子、前掲書、261-265頁。

のとして「水滴」を読むことを試みている。そして以下に説明するように、「水滴」の物語は、依存とケアの関係において、けっして女性たちを排除していない。それどころか、徳正や石嶺たちのいのちは女性のケアなしには存在しえないとさえいえよう（しかし、次節でさらに考察するように、それは女性が一方的にケアを担う現実を肯定するわけではない）。

ウシと徳正の依存とケアの関係を考えるには、徳正がセツの死を知った場面まで遡ることが必要である。この出来事を契機として、それまでケアを必要としない精力的な労働者として働いていた徳正がむしろウシのケアを必要とするようになる。ウシは怠惰な生活に耽る徳正を憂慮し、彼が自律するのを助けるべく、そうした生活に陥った原因を、たとえば「子供ができないこと」などにみていた⁽²²⁾。その解釈が正しいかどうかにかかわらず、この時点ですでに、徳正の不調の原因を見出すために、あれこれと試行錯誤のケアを行うウシの生活の基本的なスタイルが成立していると言えるだろう。徳正が足を腫らして倒れるまえから、ウシと徳正の依存とケアの関係はすでに始まっていたのである。

となれば、この関係が「水滴」の物語以後も同じように継続して紡ぎ出されていくということを想像することは難しくない。むしろ、「水と記憶の循環」から排除されているという、村上陽子の指摘があったように、徳正の語りえない記憶に触れることのできないウシが、直接かれの不調の原因を特定することは、今の段階においては難しい。しかし、たとえばトラウマ研究者である宮地尚子が指摘するように、語りえない記憶をもつ存在のケアにおいては「ただそばにいる」ことじたいが重要な意味をもつ⁽²³⁾。これをふまえれば、次のような場面を見ると、ウシの存在は徳正の記憶に直接ふれることはできないながらも、たしかに彼にとって何にも代えがたい重要なものとなっていることがうかがえる。

十日が経った。徳正は窓から裏庭の夏草を眺めていた。水が止まってから、兵隊達は二度と現れなかった。それでも一人で寝るのが不安で、三日の間はウシにベッドの横の床で寝てもらった。口とは裏腹にウシもまんざらではないようだった。明かりを点けっ放しにしたまま、自分が寝たきりになっていた間の村の出来事を聞きながら、水を飲みにし

(22) 本文、220、221 頁。

(23) 「トラウマを抱えた人にとって、語ることは容易ではありません。 […] 特に語りにくい内容のものもあります。そんな場合、本人が周囲の人に望むことは、『そっとしておいてほしい』ということだけかもしれません。けれどもそれは、『離れていつてほしい』ということではありません。むしろ、『ただそばにいてほしい』に近いでしょう。『ただそばにいる』ということには、『具体

的には何か知らないけれど、何かつらいことを抱えているとわかっていて、話をする気になったらいつでも聞く、わかろうとする』ということも含まれます […]」（宮地尚子『トラウマ』岩波新書、2013 年、108 頁）

た兵隊や石嶺のことを話そうかと迷った。しかし、結局話せなかった。これからも話すことはないだろうと思った。ただ、体調が回復したら、ウシと一緒にあの壕を訪れてみたいと思った。戦争中、ここに隠れていたのだ、とだけ言い、花を捧げ、遺骨を探すつもりだった。⁽²⁴⁾

記憶を語ることと、語らないこととのあいだで揺れ動く徳正のこれからの生活は、ウシと「ともにいること」という関係性に包括されうえて成立している。むろん、このあと、「そう決意する一方で、自分はまたぐずぐずと時間を引き延ばし、記憶を曖昧にして、石嶺のことを忘れようとするのではないかと不安になった」⁽²⁵⁾と続くように、徳正はふたたびトラウマ化した記憶に背を向けようとする。しかし一方で、「明日からや畑に出でてい、働くんど」と「自分に言い聞かせ」るように、徳正は以前にくらべ、たしかに「自律」の方向へと向かってもいる⁽²⁶⁾。さらに、庭の手入れを始めようとする徳正が描かれた物語の終幕場面からは、彼の生活空間がそれまでとは異なる意味づけによって変容しつつあることがうかがえる。

草を薙ぎ払いながら進むと、^{ぶっそうげ}仏桑華の生垣の下に、徳正でも抱えきれそうにない巨大な^{すぶい}冬瓜が横たわっていた。濃い緑の肌に産毛が光っている。溜め息が漏れた。軽く蹴つてみたが動きもしない。親指くらいもある蔓が冬瓜から仏桑華に伸びている。長く伸びた蔓の先で、黄色い花が青空に揺れていた。その花の眩ゆさに、徳正の目は潤んだ。⁽²⁷⁾

日常生活における労働の反復が、徳正の語りえない記憶を五十年ものあいだ抑圧していたのに対し、ここでは庭の手入れという日常の生活実践において、抑圧された記憶に触れ合う瞬間が描かれている⁽²⁸⁾。寝室と戦場の相互浸透した空間が徳正と石嶺のあいだの「新たなケア」を生み出したことは、その後の徳正の生活にも影響を及ぼしていたことがここにおいて明らかとなる。徳正の生活空間は、いまや、戦場の記憶と相互浸透することによって様々な瞬間において意味づけを新たにしている。そしてこの意味づけは、石嶺という本来ケアすべき対象を中心に据えて生み出される秩序のもとに成立しているのだ。また、先ほど引いた本文にもあるように、沖縄戦の最中、徳正が隠れていた壕も、「花を捧げ、遺骨を探す」というケアを

(24) 本文、226、227 頁。

(25) 同上。

(26) 同上。

(27) 同上。

(28) 沖縄戦由来の PTSD には、壮年期における日々の活動や労働への没頭が、トラウマ記憶を抑圧し、

時間に猶予ができる晩年になって症状が現れる「晩発性 PTSD」と分類されるものが存在する。徳正の戦後の生もおそらくこれと無関係ではないだろう。(蟻塚亮二『沖縄戦と心の傷：トラウマ診療の現場から』大月書店、2014 年)

行う場として、新たな価値を与えられた現在の空間へと変貌しようとしている。

さらに注目すべきは、徳正の「涙」である。記憶と情動の結びつきが、語りえないものの表出としてその顔に表れるとき、おそらく、記憶は語られないながらも、そばにいる他者にみずからの痛みの存在を訴えるはずだ⁽²⁹⁾。その痛みの表出は、しかし他者によって理解可能なものとしては存在しない。冬瓜を見て泣くという行為は、解釈困難な痛みとして、他者のケアを求めているが、病因のわからない痛みに対しては、人は「ただそばにいる」ことしかできないのである。そしてこの寄り添いのなかで、ケアを必要とする者にみずからの時間と配慮を与えるという専心は、ケアする者とされる者とのあいだに絆を生み出すだろう。このようにして「水滴」の登場人物たちは、戦後さまざまなかたちをとって表れる回避不可能な暴力とともに生きながらも、他者と結びつ依存とケアの関係を通じてみずからの現在の生をお互いに倍化していくはずだ。

また、庭の冬瓜は、徳正の身体から離れ、「自律」しようとしているという点で、それまでとは異なる存在であるともいえる。その「自律」は、徳正による石嶺のケアという関わりのなかで紡ぎ出された一つの達成——すなわち友情・絆——であるがゆえに、それを見て「徳正の目は潤んだ」のではないか。つまり、それは同じ壕にいた兵士と徳正との間における時間をかけた依存とケアの関係を介して育まれた、他でもないこの〈冬瓜〉なのである。

4. 依存とケアの水と、濁り——ケアする者へのケアと清裕の企み

最後に確認したいのは、依存とケアの関係をめぐる清裕の役割と、「水と記憶の循環」におけるウシのあらたな位置づけに関してである。

これまで見てきたように、ウシと徳正とのあいだに結ばれた依存とケアの関係は、徳正と石嶺との関係をも包み込むような包括的なものであった。しかし一方で、「妻」であるウシに対してそのような役割を担わせているという強制性において、この物語における女性表象がジェンダーの観点から看過できない問題を含んでいるという批判も当然ありうる。

しかしながら、依存とケアの関係において、ケア行為を行う者の自由は、リベラルな自律的主体の自由とは根本的に異なるものであることをまず考慮する必要がある。徳正の病状を心配するウシが「四十年近く農業をしながら二人きりで暮らしてきて、どちらかが欠ける生活など考えたこともなかった」⁽³⁰⁾と思うように、ウシによる徳正のケアは、強制的なものであ

(29) 宮城セツの死を偶然知ったさい、徳正が涙を流さなかったことを思い出せば（本文、222頁）、この涙が徳正の変化を表していると読むことができる。

(30) 本文、196頁。

りながら、それを回避することがむしろ自分自身の生き方を裏切るような内的必然性を伴うものでもある。ウシがいかなる「自由」を与えられようとも、その自由は、徳正のケアから逃れることよりも、むしろ徳正をケアするためにこそ行使されるだろう。

そうであっても、女性に対してケア行為を一方的に要求するようなジェンダー化された社会じたいが、無批判に肯定されてよいというわけではもちろんない。正義論を依存とケアの観点から批判したエヴァ・フェダー・キティは、依存とケアの関係が人間の生において本質的であると価値づけながら、同時に依存者（ケアを必要とする者）をケアする「依存労働者（dependency worker）」⁽³¹⁾の社会的平等の可能性を考察している。ここでキティが持ち出すのはもともとギリシア語で「奴隷」や「使用人」を意味した「ドゥーラ（doula）」⁽³²⁾という存在である。依存とケアの関係は人間にとって避けられない本質的な関係であり、その関係は、一定の愛着による絆に基づくものである。つまり徳正とウシの関係がそうであったように、関係を取り持つ者たちそれぞれが代替困難なのだ。それゆえ、キティはそうした関係性そのものを維持することを前提としたケアの必要性を指摘する。そこで提案されるのが、ケアする者に対しケアを提供する者の存在なのである。そして「水滴」の物語には、まさにそのような役割を担う人物が描かれていた。すなわち、清裕その人である。

徳正の家の庭の手入れがおろそかになっていることに気づき、清裕はウシに声をかける。

「姉さん、こんなに雑草茂らしてな」

ウシの目が一段と陰しくなり、顔がほてっているのが分かった。畑や庭に雑草を茂らせることが、ウシにとってどれだけ屈辱的なことか承知していた清裕は、機嫌を損ねないように注意しながら交渉に入った。

「姉さんよ、草取りや畑仕事の手伝いに雇ってとらさんがや？ 徳正の看病の手伝いもすんど。手間賃は少しで済む^しんど。あと、物喰わしてくれたら助かるしが……」

ウシは怒った表情のまま考え込んだ。内心、手助けはほしかった。畑に出る時間は限られていて、草取りひとつとっても手が回らないし、徳正の看病にしても、床ずれを防ぐためにもっとこまかく姿勢を変えてやりたかった。隣近所から手助けの申し出もあった

(31) エヴァ・フェダー・キティ『愛の労働あるいは依存とケアの正義論』（岡野八代・牟田和恵監訳、白澤社、2010年）において、訳者も注釈を加えているように、キティは「依存労働（dependency work）」という言葉で、雇用労働・賃労働だけでなく、知人・家族などに対する無償のケア行為も含めた「依存者を世話する仕事・いとなみ」として使用している（同上、122頁）。それが無

償であれ有償であれ、依存労働は対象との情緒的絆をある程度前提とするため、依存労働者は代替困難なものであり、通常の労働とは性質が異なる。

(32) エヴァ・フェダー・キティ、前掲書、243頁。

が、まわりに少しでも迷惑をかけることはウシの気性が許さなかった。清裕をあてにせざるをえないことは腹立たしかったが、「怠けたり家の物を盗ったりしたら腰骨^{くしぶに}叩き折ってとらすんど」と脅して、一日千円三食付きで雇うことにした。⁽³³⁾

たしかに、このあと清裕は徳正の足から滴る水の効能を利用して詐欺まがいの商売を始めることとなる。しかし、彼がウシの生活の苦悩に気づき、援助を申し出ていなかったなら、ウシと徳正との関係も脆弱なものであったはずだ。とすれば、その存在は軽視できるものではない。この小説における脆弱な身体をめぐる依存とケアの物語は、ケアする者に対してケアする存在である清裕を見ることによって、はじめてその包括的な関係性の広がり把握することができるのである。

また、そうした清裕の援助を呼び込んだのが、生い茂った庭の雑草であるとするならば、徳正の足から滴る水を庭に撒くという行為によって、ウシ自身がその可能性をつないだといえないだろうか。つまり、ウシもその意味では「水と記憶の循環」に加わっている。しかしそれは「奇跡の水」がそうであったような、自らを癒す水によってではなく、ケアを必要とする具体的な他者——それは人以外の動植物や他なる存在すべてを含みうる——としての雑草を癒し、その成長を促す水によって行われた。セツから与えられた水は徳正を癒した。徳正から与えられた水は石嶺を癒した。ウシから与えられた水は雑草を、そしてのちに庭に現れることとなる〈冬瓜〉をも成長させるだろう。

一方で、それらの癒しは、通常の治療行為とは異なり、痛みの原因を特定しその痛みを解消することを目的としているのでもないし、いまの時点では癒されることの困難な痛みに対する未完の癒し以外の何物でもない。この水は、痛みを見えるものとして、他者に自らの脆弱さを訴えるための水でもあるのだ。水を与えられた雑草はケアする者としてのウシの苦悩を他者に見えるものとして可視化し、庭の〈冬瓜〉は徳正や他の戦争体験者たちの苦悩の存在を示す。水を与えられた石嶺は、いまだに徳正の記憶の痛みとして残り、その痛みは「涙」として現れる。そして戦場でセツから譲り受けた水もまた、徳正にとっては「痛み」に他ならなかった。

(33)本文、206、207頁。

あふれた水が〔石嶺〕頬を伝わるのを目にした瞬間、徳正は我慢できなくなって、水筒に口をつけ、むさぼるように水を飲んだ。息をついた時、水筒は空になっていた。水の粒子がガラスの粉末のように痛みを与えながら全身に広がっていく。⁽³⁴⁾

すなわち「水滴」における水とは、それによって他者の依存に応答し、ケア関係を可能にすると同時に、消え去ることの困難な痛みを波及的に循環させることで、そうした痛みや苦悩とともに生活する人々のあいだに生まれる希望や絆を育むことを可能にする、「依存とケアの水」なのだ。

——とはいえ、いったいこの「依存とケアの水」や「奇跡の水」は、これまで説明してきた「ケア／治療」、あるいは「記憶の循環／金の循環」といったような、明確な対立項として区別できるものなのであろうか。たとえば、結果的には依存とケアの関係において重要な役割を担った清裕であるが、ウシに対する彼のケアは、純粋な善意にもとづくものではなく、「奇跡の水」による商売という打算的な企みをたっぷりと含んでいるのは明らかだった。また、ウシが庭に振りまいた水が、雑草の成長を急激に加速させたのは、その水に「奇跡の水」としての効能があるからに他ならない。その意味で、この「依存とケアの水」には、実は「奇跡の水」が混入している。いうならば「依存とケアの水」は、純粋な依存とケアの関係によっては説明できないものを含んで濁っている。日々の生活のために自己本位的な振る舞いをせざるをえない、清裕のような立場にある人々をも包摂したかたちで「水滴」の物語を流れているもの——それが、濁りを抱えて生活する人々をつなぐ「依存とケアの水」なのである。

結論

本稿は、沖縄戦の記憶の現在性を、依存とケアの物語を通じて描くテキストとして「水滴」を論じてきた。従来指摘されてきたように、本作は確かに歴史・集合的記憶を逸脱する個人的記憶を語ることの不可能性を描いたものとして読むことができる。また、身体の変異というモチーフを利用することによってそのような共有不可能な記憶を、その共有不可能性を維持したまま読者に伝えうるという「共振」⁽³⁵⁾の可能性を考えることは、例えば沖縄戦の非体験者が「当事者に〈なる〉」（屋嘉比収）ことを実践するうえでの端緒となるだろう。しかし、そうして記憶の問題が主題化されることによって不可視化されてしまう、より具体的で生活に根

(34) 本文、219頁。〔 〕内は引用者による補足、傍点部も引用者による。

(35) 村上陽子は、読み手が了解不可能な他者の「痛み」の記憶を領有化できない異物として受け取るとき、意味の伝達とは異なる両義的な（ディス）

コミュニケーションが成立することに注目し、そうした経験に対して「共振」という表現を使っている。（村上陽子、前掲書、8頁）

ざした人間関係も「水滴」には描かれていた。「水滴」は、語りえない記憶に苦しむ人々の生活を中心とし、そこから波及的に広がり、構築されていく包括的な人間関係を、依存とケアの営みを描くことを通じて提示している。

第1節では、戦場におけるケアの失敗に注目し、献身的なケアの成功といったステレオタイプとして表象するのではなく、その失敗を描くことによって戦争と戦後における依存とケアの関係の継続を語ることを可能にしている点を明らかにした。第2節では、寝室という親密な場と戦場の空間が、依存とケアの営みを媒介として重なり合い、その結果、徳正の生活に変化をもたらしている可能性を読んだ。その際、短時間で済む治療のための「奇跡の水」と、時間のかかるケア関係を通じてお互いの関係性を深める水滴との違いについて言及し、徳正の自責感やケア行為の意味を、ケア論的な解釈を経由することにより明らかにした。第3節では、徳正と石嶺の関係を包括するものとして、ウシのケア行為の重要性を指摘した。さらに、徳正の語りえない記憶の痛みは、ウシの寄り添いを通じて守られ、しだいにその生活実践における表現を獲得していき、未来において他者を巻き込んでいく可能性があることを示した。第4節では、徳正をケアするウシ自身の脆弱性をケアする存在として清裕に注目し、そのような援助を呼び込んだ水の循環にウシが加わることを明らかにした。本稿では、さしあたってこの循環する水を「依存とケアの水」と呼び、この循環に清裕の打算や「奇跡の水」の効能が含まれることから、それが図式的な依存とケアの関係から逸脱するものをも包括したかたちで描かれていることを示した。

以上の読解を通じて、本稿では、これまで徳正と石嶺との関係から排除されているとされていたウシや清裕をも含めた登場人物たちによる、より包括的な関係性を依存とケアの観点から明らかにし、そのことによって、語りえない戦争の記憶によって秩序づけられた人間関係を通じた現在時の抵抗のあり方を、あくまで人々の生活との関わり合いの中で想像していく手がかりとして提示できたと考える。

参考文献

蟻塚亮二『沖縄戦と心の傷：トラウマ診療の現場から』大月書店、2014年。

キティ、エヴァ・フェダー『愛の労働あるいは依存とケアの正義論』岡野八代・牟田和恵監訳、白澤社、2010年。

栗山雄佑『『平和通りと名付けられた街を歩いて』論——テロルの裏の沈黙について』『越境広場』4号、2017年所収。

小館貴幸「死者とケア——ケアにおいて存在しうる死者——」『ケアの始まる場所：哲学・倫理学・教育学からの11章』金井淑子・竹内聖一編、ナカニシヤ出版、2015年所収。

新城郁夫『沖縄文学という企て：葛藤する言語・身体・記憶』インパクト出版会、2003年。

プーテレイ、スーザン『目取真俊の世界：歴史・記憶・物語』影書房、2011年。

宮沢剛「目取真俊『水滴』論——幽霊と出会うために」『文学の闇／近代の沈黙』（「文学年報」創刊号）2003年所収。

宮地尚子『トラウマ』岩波新書、2013年。

村上克尚「波及する戦争——『眼の奥の森』を読むために」『越境広場』4号、2017年所収。

村上陽子『出来事の残響：原爆文学と沖縄文学』インパクト出版会、2015年。

メイヤロフ、ミルトン『ケアの本質』岡本真・向野宣之訳、ゆみる書房、1987年。

目取真俊『目取真俊短編小説選集2：赤い椰子の葉』影書房、2013年。

屋嘉比呷『沖縄戦、米軍占領史を学びなおす：記憶をいかに継承するか』世織書房、2009年。